

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 567

## ナチスの武装親衛隊に所属していたことを告白したギュンター・グラス

後に映画化された『ブリキの太鼓』で知られるドイツのノーベル賞作家ギュンター・グラスが、06年8月12日の『フランクフルター・アルゲマイネ』紙に掲載されたインタビューで、17歳の時に1844年秋から終戦までの5ヶ月間、ナチスのヴァッフェン・SS（武装親衛隊）に所属していたことを告白し、ドイツはもちろんのこと、全世界に衝撃を与えている。このインタビューは9月1日に発売予定の、80歳になるうとする彼の自伝『たまねぎの皮を剥きながら』の出版に合わせて、その自伝の中の「告白」について語ったものである。なぜ、この「告白」が問題視され、ドイツ社会で大論争を巻き起こすことになったのか。それは、「戦時中は、高射砲部隊の補助員になり、後に兵士になった」と話していたグラスが戦後60年間、武装親衛隊に所属していたことを隠しつづけてきたからだ。

彼はナチズムについて多くのことを語ってきたが、自分がナチズムに具体的にかかわってきたことだけは語らなかったのである。つまり、語らなかったことが問題になっているだけでなく、語ってきたことが語らなかったことを浮上させるよりも、ますます沈潜させてきたことが問題になっているのだ。グラスはこれまでナチズムについてどのように語ってきたのか。『ナチスの太鼓』持ちだった<sup>ギュンター</sup> G・グラス（『諸君！』06・10）の中で、在独の作家川口マーン恵美は次のようにグラスの行動を紹介する。

《1985年、コール首相が当時のレーガン大統領とともに、ドイツのビットブルクにある戦没者墓地を訪れたことがあった。これはアメリカとドイツの戦後40年間の努力と和解を象徴する、いわば歴史的邂逅であるが、この墓地に親衛隊の兵士たちが眠っているという事情があったため、抗議運動が巻き起こった。親衛隊はヒットラー直轄の部隊で、戦後のニュルンベルク軍事裁判では組織全体が犯罪集団と見做されている。つまり、第三帝国の理念に骨の髄まで心酔しているエリート集団である。だからこそ抗議運動が巻き起こったのだが、その先頭に立ったのがギュンター・グラスで、彼はこの出来事を「歴史の捻じ曲げ」と軽蔑的に評したのだった。

彼は、どんなに時間が経ってもナチズムを決して許そうとはしなかった。そして、全てのドイツ人にはホロコーストに対する罪があるとして、その責任を執拗に追及し続けた（…）。戦後ドイツの左翼知識人がギュンター・グラスを「ドイツの良心」として仰ぎ見ることになった<sup>ゆえん</sup>所以は、この徹底したドイツ人糾弾のポリシーにある。そして、それは現在も健在で、<sup>くだん</sup>件のFAZでのインタビューでも、彼は次のように語っている。

「1945年に起こったことは崩壊であり、降伏ではなかった。これを軽く見做そうと

する人たちの言葉を借りれば、ドイツは真っ暗になってしまったのだ。彼らはあたかも、哀れなドイツ国民がある邪悪な者たちの集団に惑わされたかのように見せかけようとする。しかし、私は子供の頃、すべてが白昼にどのようにして起こったかを見ているのだ。それも、熱狂と賛同の下に。(中略) この熱狂とその原因を私は追究したかった。すでに『ブリキの太鼓』でもそうだったし、それから半世紀が過ぎた今、私の新しい本でも同様である」

つまり、ギュンター・グラスが、ナチズムを執拗に作品のテーマとして取り上げるのは、ドイツ人が自分たちの犯罪を忘れてしまわないようにするためなのだ。「私は、忘却に対抗するために書く」というのは彼の言葉であった。」

そう書いて彼女は、「《ドイツの良心》ギュンター・グラスは、自分の親衛隊への入隊だけは忘却してしまっていたのである。これではみんなが啞然とするのも無理はない。しかも経歴として、親衛隊の代わりに国防軍の対空部隊と記していたというから、なおさら始末が悪い」と言い、問題は、「物心付いて以来ずっとナチ教育を受けてきた17歳の若者が、さしたる疑問も感じぬまま戦争末期に半年間親衛隊に所属していたという事実」にあるよりも、「結局、「ドイツの良心」を演じていた人の「良心」が、蜃気楼のように揺らいでしまったところにあるのだと思う」とみる。「モラルの審判者として他人を裁いていた人間と、親衛隊にいた過去を偽っていた人間とのイメージの落差は激しい。裏切られた人々はしばし茫然となり、そのあと我に返って憤りの声をあげ始めた」と、次のような声を列記する。

グラスと同じダンツィヒ出身の元ポーランド大統領レフ・ワレサは、グラスにダンツィヒ名誉市民権の返還を要求し、「親衛隊での経歴がわかっていたなら、名誉市民権は授与されなかったであろう」(ビルト紙)と怒ったが、国内の極右勢力を勢いづかせることを懸念して後に和解の方向へ転換。

与党、キリスト教民主同盟(CDU)の文化担当議員ヴォルフガング・ベルンセンは、グラスが《生涯を通じて、とりわけ政治家に高いモラルを要求し続けてきたことを挙げ、「その要求を今こそ自分自身にも当てはめ、これまでに受けたあらゆる栄誉を尊敬に値するやり方で返還すべきである」(ビルト紙)としている。》

「彼はノーベル賞を不当な手段で手に入れた。もしも、親衛隊の経歴を明らかにしていたなら、賞を受けられなかった可能性は高い」(バイエルン放送)と述べた文芸批評家ヘルムート・カラセクは、「さらに、前述の戦没者墓地の一件を例に引き、「ここに自己批判能力の一切欠落したモラリストの不快な性格が示されている」と嫌悪の念を隠さない。ちなみに彼は、今回の事件を「経歴詐称」と言い切った唯一の人間である。》

「60年間、しかも、ナチ問題でたえず国民の罪悪感を突つき続けた人が、どうして今頃になって自分が親衛隊にいたと告白することができるのか理解できない」(ナチ問題専門家ヨアヒム・フェスト、ビルト紙)

「コール首相とアデナウアー首相に関する彼のコメントの多くは、吐き気を催す類の不

快なものだった」(作家ロルフ・ホーホフト、ケルン・シュタットアンツィガー紙)

《この行列に、職場で、家庭で、電車の中で、巷の民衆が続々と加わる。「嘘つき」と偉そうに他人を罵倒していた人が、実は嘘をついていたことを知るのは、心安らぐものである。》

グラス擁護の声を、《① 17 歳のときの行動をあげつらうのは妥当ではない、②文学者としてのグラスの功績は揺るがない、③告白した勇気を尊重すべきだ、④騒ぎすぎ、という 4 通りの意見に集約》して、現代ドイツ文学界の重鎮マーティン・ヴァルザーの擁護にこう触れる。彼の《自叙伝に、親衛隊を志望した貧困家庭の青年たちのことを書いた箇所がある。息子が親衛隊に入れば、両親にはウクライナ地方の家と農地が約束されていたという。彼の脳裏には、当時を生きた者にしかわからない慟哭のような感情があるのかもしれない。》

グラスの「告白」騒動によって発売予定が繰り上げられた自叙伝『タマネギの皮を剥きながら』は売れに売れ、《あまりに騒ぎが大きくなったため、8 月 17 日の夜遅く、ドイツ第一放送 (ARD) の特別番組として、ギュンター・グラスの 30 分にわたる緊急インタビューが放映された。視聴率が 8.7 パーセント (視聴者 148 万人) だったというから、信じられない関心の高さである》と前置きして、インタビュアーのウルリヒ・ヴィッカートの質問に入っていく。

《ヴィッカートの聞き出したかったことはただ一つ、「なぜ、今になって告白したのか」ということだったと思う。それは言い換えれば、「なぜ、今まで黙っていたのか」ということである。しかし、それに対するギュンター・グラスの答えは、終始不可解なもので、ヴィッカートは手を替え品を替え何度も同じ質問を繰り返すことになった。

彼の論理を私なりにまとめてみるとこうなる。

「沈黙というものは結果であり、重要なのは、沈黙のあいだに心の中で起こっている現象である。つまり、頭の中にある記憶をどうにかして話す、あるいは、書くという行為にまでもっていくことができたとき、沈黙という行為はようやく終結する」

「私は親衛隊にはいたが、罪の意識はなかった。人を殺さなかったし、その他の犯罪にも手を染めていない。しかし、いつかそれを大きな枠の中で書きたいと思っていた。そして今、内的な抵抗を克服し、初めて自伝という形で書くことができた」

このグラスの応答は彼女にとっては大きく説得力を欠いており、《詭弁にしか響かない》と感想を述べている。

《ところが、納得できなかったのはヴィッカートも同じだったらしい。ギュンター・グラスの著書の中の一冊を取り出し、彼が 1967 年にイスラエルで行ったという講演の抜粋を朗読し始めた。親衛隊の件がすっぽり抜け落ちている箇所を読み終えたヴィッカートが、「なぜ、ここで言えなかったのですか」ともう一度迫ると、ギュンター・グラスは言葉につまり、「ええ、言うこともできたでしょうね」と答えた。ヴィッカートの質問は、再び宙に浮いた。そして、私はなんだか悲しくなった。》

グラスが自分の経歴を隠したことは明白である。なぜ隠したのかについてもおおよその見当がつく。親衛隊の件は彼にとって不利な事実であったからだ。しかし、この嘘はどうしても隠し通さなくてはならないほどの秘密ではなかったとしても、いや、それほどの秘密ではなかったからこそ逆に、嘘をついたということが作家になった彼のなかに大きな〈しこり〉となって巣くいつづけたと思われる。グラスにとって〈嘘をついた〉ということは、彼の生涯を左右する大きな出来事になったと推測される。なぜなら、〈嘘をついた〉ことによって彼は作家になった、つまり、作家にならざるをえなかったと思われるし、親衛隊の件で〈嘘をついた〉ことによって彼は逆にナチズムの糾弾に生涯を賭けねばならなかったと思われるからだ。彼の生涯は〈嘘をついた〉ことによって始まったと思えるほどに、彼にとって〈嘘をついた〉ことは生涯の問題であったという気がする。

おそらくグラスと彼以外の人びととの間には、埋めることのできない落差があった（生じていた）。彼にとっては告白することに問題があったのではなく、どのようにして告白するかが問題であったのに対して、人々の関心は彼がこれまで何度も告白する機会があったのに、「なぜ、今まで黙っていたのか」、「なぜ、今になって告白したのか」という点に（のみ）注がれていたからだ。《詭弁にしか響かない》彼女にしても、また擁護側にしても、この点を軸にしてそれぞれ対照的な見方になっているだけのことで、〈嘘をついた〉ことの告白によって清算することが問題なのではなく、〈嘘をついた〉ことが彼の中で成長しつづけてきた問題にどこで、どのようにして向き合うのかというグラスの内的状況にいずれも交差しえないところでの批判であったり、擁護にしかすぎなかった。

グラスの応答に納得できない彼女は、「なぜ、今になって告白したのか」という疑問を次のように推察してみる。

《彼は旧東ドイツの秘密警察（<sup>シュタージ</sup> S T A S I）が調べ上げた自分についての資料が公開されることを恐れているというのである。S T A S Iの資料は、通常は本人が許可しない限り、他人の目に触れることはない。しかし、ギュンター・グラスは一般人ではない。彼の死後、研究目的で資料が公開される可能性は十分にある。そのときに親衛隊だった過去が暴かれるということを想像すると、ギュンター・グラスは死んでも死に切れないと思ったのではないかという推察である。テレビで見た限り頭脳明晰、いたって健康そうだったとはいえ、年齢からいうとそろそろそういう心配をしたとしても不思議はないかもしれない。》

もちろん、そういう推察は成り立つし、ノーベル賞受賞作家として功成り名遂げたグラスがそう考えたとしても別に不思議ではない。充分成り立つ推察だが、この推察に決定的に欠けているのは〈作家〉であることの問題である。おそらくここで問われているのは、〈作家〉とはどのような存在であるか、ということでもある筈だ。作家は読者にむけて書いているだけではない。なによりもまず自分にむけて書いているのである。自分にむけて「本当のこと」を書こうとしてきた作家が〈嘘をついた〉ことがあるという

ことになれば、その〈嘘をついた〉ことに対して自分の中でどのように決着をつけるかが問い迫られてくるのは避けられない。〈作家〉というのは、自分が書いてきたことには自分で責任をとらなくてはならないし、生きているあいだに決着をつけなくてはならないことを覚悟する存在なのである。誰がどう言おうとも、自分の眼が黒いうちはそうしなければ、〈作家〉であることをやめなくてはならないのだ。

日本の芥川賞作家辺見庸はインタビュー（『現代』06. 10）のなかで、「恥の花じゃなくて、無恥の百花繚乱。無恥のばか花が咲き乱れ、まっとうな知が駆逐されている。ただし、これを見れば見るほど無恥状態に麻痺し、恥知らずという濾過性病原体に骨がらみ感染してしまって、かつては赤面の至りとされていたことさえ、いまは当然至極とあいな」っている「無恥と忘却の国に生きる」ことを「自分自身への審問」としていると述べながら、グラスに次のように触れている。

（「人間としての恥辱」を見据えるという）「その文脈で、ドイツのノーベル賞作家ギュンター・グラスがナチスの武装親衛隊に所属していたと告白した出来事は、ぼくにとって大変なショックであっただけでなく、人間の恥辱という実存的問題あるいはファシズムと恥辱という歴史的課題についての彼我的感覚の違いを知る上でも非常に示唆的でした。グラスは戦後61年目の告白の動機に関し『（親衛隊に所属していた事実）戦後は恥を感じ、苦しんできた』ためとドイツ有力紙フランクフルター・アルゲマイネに語っています。告白しなければ永遠に知られることも赫々たる名誉が崩れることもなかったであろう彼17歳当時の暗い事実を、当年78歳のグラスに話させたものは、国家でも社会でもお金でもない、彼個人の内奥の恥の感覚だったわけです。グラスは告白を他者に促されたのではなく『自分自身に強いた』とも語っている。そのことに、ぼくは言葉もなく、ただ呻るのみです。果たしてドイツおよび周辺国の反響は大きく、ノーベル賞を自主的に返還すべきだという声も相次いで起きています。

翻って、日本では、過去に戦争協力をしようが、例えば侵略戦争遂行と国威発揚のために内閣情報部が組織した作家らによる宣伝家、いわゆる『ペン部隊』に所属していた事実があるが、ご当人も社会も屁のカップという不可思議な事情がある。ナチスと天皇制ファシズムの問題は、言うまでもなく、単純に同列には置けません。けれども、ペン部隊に属してさんざ中国侵略を美化した物書きが、〈恥に苦しむ〉どころか、戦後は悪びれもせず文化界の指導的地位に就いたり文化勲章をもらったりした感覚は、授与するほうも受勲するほうも、言祝いだマスコミもですが、異常というほかない。グラスの告白に接し、ぼくはむしろ日本という国の途方もない無恥を思ったのです。その無恥はいま、さらに大きく輪を広げ、社会の全域に及んでいるようです。」

なるほど、日本社会で当然のように精神的に振舞われている「この国独特の無恥と忘却」の中にグラスの「告白」を置いて考えると、「彼個人の内奥の恥の感覚」は際立って輝いて見える。〈作家〉として生きてきた者なら、誰に対してよりもまず自分自身にむかって告白するのは当然のこととと思っていたが、作家や詩人の振りをする物書きがあ

りふれているなかではやはり稀有<sup>けう</sup>のことなのだと改めて思い返される。しかしながら、自分自身に嘘をつきつづけ、その嘘に向き合わない物書きが多かろうとなんであろうと、そしてグラスが著名なノーベル賞作家であろうとなかろうと、「書くこと」は、「書きつづける」ことは自分自身の出鱈目に向き合い突き刺すものでなければ、書いたことにはならないということはいうまでもない。〈嘘をつく〉自分を含めてあらゆる嘘に対峙しなければ、一体「書くこと」になんの意味があるだろう。その意味でグラスは「告白」を通じて、自らが「作家」であることを改めて確認し、世に問うたのではなかったか。

在独ジャーナリストの熊谷徹は「ギュンター・グラスが落ちた『歴史リスク』の罨」（『中央公論』06. 11）で、グラスが武装親衛隊に所属した理由に視線を及ぼせている。

《グラスは、1927年にダンチヒ（現在はポーランド領のグダンスク）に生まれ、小さな食料品店を営む両親と妹とともに、狭い二部屋のアパートで少年時代を過ごした。暮らしは楽ではなく、両親はグラスに自転車を買ってやることもできなかった。グラスは、しばしば客の未払い金の取立てに行かされている。

1937年、つまり10歳の時に、グラスはナチスの少年団であるヒトラー・ユーゲントの下部組織、ユングフォルク（小国民団）に加盟する。ナチスは、娯楽が少なかった当時、少年たちをハイキングやテントでの野外合宿、キャンプファイヤーなどの活動に積極的に参加させた。子どもたちは、家庭から逃れる解放感を味わっただけでなく、「民族共同体」としての連帯意識を、幼い頃から植えつけられたのである。グラス自身、小国民団での体験を楽しく思ったことを述懐している。このこと自体は、グラスがナチス思想によって、特に強く触まれていたことを示すものではなく、当時のドイツで少年時代を過ごした世代にとっては、ごく当たり前の感想だった。

海岸に配置された88ミリ高射砲部隊での訓練は、グラス少年にとって苦痛ではなく、単調な学校生活からの解放を意味した。彼は15歳の時に潜水艦部隊に志願するが、当時はや新しい乗組員は募集されていなかったため、軍国少年の願いは叶えられなかった。

グラスは、召集されてもいないのに軍務を志願した理由として、貧しい家庭の屈辱から脱出したかったという願望を挙げている。二部屋のアパートでの、家族4人での暮らしは、思春期を迎えつつあったグラスにとって苦痛だった。家族専用のトイレはなく、グラス家は他の三世帯の家族と、踊り場にある一個の洗面所を共同で使っていた。

さらに、彼はニュース映画で、敵艦を次々と沈めるUボート部隊、北アフリカの砂漠で英軍と死闘を繰り広げる、ロンメルの子戦車部隊などの映像に魅せられたことを、告白している。

Uボートの乗組員にはなれなかったグラス少年だが、彼の名前と住所は軍に登録され、1944年の末、グラス家に突然軍からの召集令状が舞い込む。ドレスデンの軍事務所に出頭した時に、彼は自分の部隊が、武装親衛隊の第十SS戦車師団「フルンズベルク」であることを知った。

武装親衛隊は、親衛隊長官ヒムラーの指揮下の戦闘部隊で、国防軍とともに前線で戦うことを主な任務にしていた。一般的に装備や武器は国防軍よりも優れており、終戦時には91万人もの兵力を抱えていた。開戦当初は完全な志願制で、熱狂的なナチ党員の比率が多く、腋の下に血液型の入れ墨を施す独特の規則があった。だが1944年末には、戦局が悪化して人員の消耗が激しかったため、戦力を補充するために、グラスのように召集される兵士もいたのである。彼は腋の下に入れ墨を施される時間もなかった。

グラスは、当時武装親衛隊について、激戦地に投入されるエリート部隊としか考えておらず、ナチスの犯罪の象徴とは感じなかったと述べている。

確かに武装親衛隊は、強制収容所で多数のユダヤ人を殺害した、親衛隊の「帝国保安主要局（RSHA）」や、その指揮下で虐殺を専門に行った特務部隊（アインザッツ・グルッペ）とは異なる存在である。グラスが属した第十SS戦車師団は、1943年に創設された比較的新しい部隊で、ノルマンディーやアルンヘムで連合軍と戦っているが、住民や捕虜の虐殺などを行ったという記録もない。》

以上の武装親衛隊についての説明のうえに、グラスがその組織の中でどのような役割を果たしていたのかを知るために、更に次の記述が用意されている。

《グラスは戦車兵になる予定だったが、前線で供与された最新式の駆逐戦車を扱えるだけの訓練を受けていなかったため、銃を渡されて歩兵として戦わさせられた。彼の部隊は、ドイツ東部でソ連軍の進撃を食い止める任務を負われ、グラスは何度も九死に一生を得るような体験をしている。彼は、敵に向けて銃を撃ったことは一度もないと主張している。1945年の4月に、敵の砲撃によって負傷したグラスは後送され、マリエンバートの野戦病院で米軍の捕虜となる。軍務記録などによると、彼が武装親衛隊に所属していたのは、宣誓前の訓練期間も含めると、1944年の10月からの、約5ヵ月ということになる。》

グラスの所属した武装親衛隊がいわゆるナチスの殺人部隊とは異なり、17歳のグラス自身も未青年の見習い兵のような感じでこき使われただけであったなら、グラスはなにも隠す必要などなかったと思われる。どうして彼は隠そうとしたのか。熊谷は《しかし、武装親衛隊が親衛隊の一部であることには、変わりはない》と言って、グラスの部隊とは別の部隊が《残虐行為に加担した》例を列記している。

《たとえば第二SS戦車師団「ダス・ライヒ」は、フランスのオラドゥールでパルチザンに対する報復として、村人約640人を虐殺したり、ユーゴスラビアのパンチェボで住民36人を処刑したりしているほか、第一SS戦車師団は1944年のアルデンヌ攻勢で、米軍の捕虜約70人を射殺した。また、第三SS戦車師団の創設時のメンバーには、強制収容所の警護を行っていた「髑髏部隊」の隊員が多く含まれている。私は1993年に、武装親衛隊の戦車部隊に所属していた老人と話したことがあるが、彼は「ドイツがソ連を攻撃したのは正しかった」と断言し、ソ連側に1000万人を超える死者を出した侵略戦争を正当化するなど、ナチスの思想を今も抱き続けていた。》

そして、《特に被害者にとっては、武装親衛隊は今もナチスの犯罪を象徴する組織なのである》と念を押す。武装親衛隊がナチズムに基づいて創設されている以上、武装親衛隊もまた、《親衛隊の一部であることには、変わりはない》。だからこそ、グラスはその一件を隠そうとしたのだ。川口マーン恵美も熊谷徹も、ナチズムが激しく糾弾され、ナチズムの掃蕩を掲げた敗戦国ドイツの戦後社会で、ナチスにかかわっていたことが知れると、どれほどの致命的な打撃を関係者にもたらすものであるかへの一瞥を欠いているが、誰にも知られぬなら隠して生きていこうと誰もが思ったように、グラスもそうしたにちがいない。《グラスは、当時武装親衛隊について、激戦地に投入されるエリート部隊としか考えて》いなかったのと同じようにして、おそらく彼は武装親衛隊への所属の一件を隠せるものなら隠そうと考えたと思われる。

大半の者がそうしたであろうように、グラスもまた戦後のドイツを生きるうえで〈嘘をついた〉。ところが彼は政治や社会から遠ざかって、〈嘘をついた〉ことをかかえこんで市井の片隅にひっそりと生きたのではなく、全く正反対に川口マーン恵美も言い、熊谷徹も、《彼が「行動派知識人」として、政治家や市民に対して、ナチスの過去と正直に向き合うことを求めていたにもかかわらず、自分の過去については60年間にわたり隠していたことである。彼は、「ドイツの過去との対決は、十分ではない」と常に主張してきた》と言うように、グラスは《ベルリンの壁が崩壊した直後には、「アウシュビッツに象徴される民族虐殺という犯罪は、ドイツが統一されていた時に引き起こされた」と述べ、ナチスの過去を理由に、ドイツ統一に懐疑的な姿勢を示し、波紋を広げた。作品の中でも、戦争の悲劇を繰り返し取り上げたグラスは、多くのドイツ人にとって「リベラリズムの旗手」であり、周辺諸国でも「戦後西ドイツの良心」と見られたきた》が故に、彼の「告白」は大きな衝撃を呼び起こさずにはおかなかったのである。

「告白」に対する反応も非常に率直である。自分の過去を押し隠したまま、「ドイツの過去との対決」を繰り返して主張するグラスの態度は自己欺瞞そのものにみえただろうし、あるいは、60年後の80歳近くになってからとはいえ、自分の過去を正直に告白した彼の態度は誠実に写っただろう。どこに目を注ぐかによって評価が分かれてくるだけのことで、どちらの評価も他の評価を視野に入れていないことが問題であった。評論家や作家や政治家がグラスを激しく糾弾するなかで、熊谷のレポートは《これまでグラスに共感を抱いていた、リベラル層》の反応を取り上げている。

《過去との対決に関するボランティア団体「償いの証」(ASF)のC・シュタッフア代表は、私とのインタビューの中で、失望感を強く表した。「グラスが60年間もこの事実を黙っていたことに、ショックを受けた。特に彼は、過去との対決について、道徳的な立場から強い口調で発言してきたから、今回の発表で信用性に傷がつくだろう。彼がこの事実をもっと早く明らかにしていれば、名声には大して傷がつかず、むしろその発言に説得力が増していただろう」。

国際アウシュビッツ委員会のC・ホイプナー副委員長も、「グラスは社会の先頭に立



って、過去との対決を推し進めてきた人物。それだけに、彼が今になってこの告白を行ったことには失望している。彼のこれまでの功績がすべて水の泡になるわけではないが、過去との対決を批判する勢力に、攻撃材料を与えることになった」と残念がる。

左派系の新聞『ターゲスツァイトゥング』のK・ヒレンブラントは、「グラスは戦後西ドイツで過去との対決について、ベンチマーク（模範となる基準）を打ち立てた作家。彼は武装親衛隊にいたことを、60年間隠したことで、我々をだまし、自らこの基準を傷つけた。もはや、彼の言うことは信用できない」とグラスを激しく批判している。グラスが事実を告白した勇気を称え、彼を弁護する作家もいるが、ドイツでは少数派である。」

また、「ナチスに弾圧された被害者たちも、強い衝撃を受けた」ことを、レポートしている。

《第二次世界大戦で600万人の死者を出したポーランドでは、グラスの告白について強い困惑が広がっている。グラスは、1993年に生地グダンスク市から名誉市民の称号を受けている。（中略）

夫を強制収容所に送られた経験を持つグダンスク在住のポーランド人、ヘレナ・レンジョンさんは私とのインタビューで、「グラスが武装親衛隊にいたことがわかっていたら、グダンスク市は彼に名誉市民の称号を与えなかっただろう。武装親衛隊は、私たちにとってナチスの犯罪のシンボルだからだ。彼が60年もこのことを隠していたことには、がっかりした」と語る。また、グダンスク郊外にある、シュトゥットホーフ強制収容所の追悼施設の副館長だった、エドムント・ベンタさんも、「グラスは、私たちの町を何度も訪れ、ドイツとポーランドの関係改善に大きく貢献した重要な人物。それだけに失望も大きい。グダンスク市民の間では、グラスの過ちを許そうという人々と、名誉市民の称号を剥奪するべきだという人々との間で、激しい議論が行われている」と述べた。少年時代にポーランドでナチスに迫害された経験を持つ、ユダヤ系アメリカ人作家、ルイス・ビーグラーは、「グラスが60年間にわたり嘘をつき続け、自伝の見本が配布されてからようやく告白を行ったことは、道徳心の欠如を意味する」と批判する。」

このレポートを読んで、グラスが「なぜ、今まで黙っていたのか」ということはもちろんのこと、彼が武装親衛隊に所属していた事実そのことにおいても激しく批判されていることも伝わってくる。理屈ではなく、生理的な次元で拒絶されているのが感じられるのだ。これらの反応は逆に、グラスが「なぜ、今まで黙っていたのか」ということの原因を照らしだしているようにみえる。レポートは、はたしてグラスは「ユダヤ人移送を知らなかったのか」という疑問に押し迫ろうとする。

《グラスは、戦後ニュルンベルク裁判で、ヒトラー・ユーゲントの隊長が、ユダヤ人殲滅計画の存在について証言するまで、ナチスの犯罪性に気づけなかったと語る。だが同時に彼は自伝の中で、宗教上の理由から、軍事教練で銃を手にするのを拒否した若者が突然兵舎からいなくなった時、友人たちが「あんな奴は強制収容所に送られて当然だ」と語るのを聞いている。人々は、グダンスク郊外にあった強制収容所シュトゥットホー

フが、体制に批判的な人々が送られる「邪悪な場所」だったことを、知っていたのである。さらに、ドイツ軍がグダンスクを攻撃した時に、激しく抵抗した市民の一人だった叔父が、降伏後ナチスに射殺されたことも自伝に記している。親衛隊の統計によると、1930年代のグダンスクには、約1万人のユダヤ人が住んでいた。グラスが武装親衛隊に召集された1944年までには、ユダヤ人だけでなく、市会議員や、大学教授など知識階級に属するポーランド人の多くが、強制収容所に送られていた。当時17歳だったグラスは、その事実を全く知らなかったのだろうか？ 彼はこの点について、自伝の中で沈黙している。

NGO「償いの証」のシュタッフア代表は、懐疑的である。「グラスの態度は、この時代を生きたドイツ人に典型的なものだ。彼らはユダヤ人らに対する弾圧を仮に知っていても、知らなかったと言い張る。ユダヤ人の移送が、当時の新聞で報じられたケースもある。それでも、多くのドイツ市民は、ナチスに心酔していたため、犯罪的な側面を知りたくないという、心理的な防衛機制が働き、そうした記憶を排除してしまうのだ。」

リポートの中で筆者は、《歴史リスクが大きな破壊力を持っている》ドイツにこう言及する。

《ドイツでは、ナチスを絶対悪とみなし、白か黒かをはっきりさせる思考形式が定着している。過去との対決では、灰色決着はありえない。グラスは、歯に衣を着せぬ発言によって、こうした「一刀両断」式の過去との対決を奨励してきた。その意味でグラスも自分が部分的にその形成に関わってきた、「過去を心に刻む文化」によって、激しい検証を受けることは避けられない。日本では「60年も前のことだから、グラスの少年時代の過ちは、時効ではないか」という声も聞かれるが、この国の過去との対決には、時効という考え方はない。たとえば、フランス文学の研究者としてドイツでは有名だったハンス・ロベルト・ヤウスは、17歳で武装親衛隊に加わった事実を長年にわたり隠していたが、数年前にその事実が明らかになったため、学界や言論界で厳しく糾弾され、文学研究者としての名声はかすんでしまった。同じようにして、名声を失った知識人は、枚挙に暇がない。》

筆者が名づける「歴史リスク」とは、《戦時中に自分が加害者だった事実と直面する作業を、長年にわたり怠っていると、被害者から批判され、現在の生活、経済活動、外交関係などに思わぬ悪影響が及ぶ》ということだが、この歴史リスクの破壊力の大きさによって、グラスは《今後「戦後ドイツの良心」としての政治的発言や活動は輝きを失い、芸術家としての功績だけが、歴史に記録されることになるだろう》と予見する。世界中に大きな衝撃を与えた『フランクフルター・アルゲマイネ』紙掲載のグラスのインタビュー（『世界』06. 11）の中で、「歴史リスク」に及ぶ個所を次にピックアップしておく。「当時起きたこうしたいっさいのことについて、私はこの自伝でもう一度自分として明らかにしておきたかったのです。特に私自身に関しても、いくつかの特定の問題について明らかにしておきたかったのです。『自分は、そのとき少年だったわけだが、いった

いなにゆえに正しい問いを発することができなかったのだろうか？ ものの分かった男の子だったはずではないか。それどころか反抗的でもあったはずだ。それなのに、自分はいかなる問いも発しなかったではないか。決定的な問いを発しなかったではないか』。これこそ私にとっての問題だったのです。そして私は過去をただ単純に描いて、あの頃はこうだったんだ、と言うにとどめる気はなかったのです。私は過去についてなによりも物語りたかったのです。物語ること、これこそ私の本領だからです。」

「これはずっとひっかかっていたことです。長い歳月ずっと黙っていたことも、この本を書いた理由のひとつです。これはどうしても心の中から出さねばなりませんでした。ようやく今になってです。当時の事情はこうでした。私は自ら志願しました。でも、それは武装親衛隊ではなく、Uボート部隊にです。まあそれも親衛隊志願と同じくらいにバカなことだったのですが。しかし、Uボート部隊はもう誰も入隊させなくなっていました。(以下は本文でも触れているので、省略する)」

「そのことで罪の意識を持ちましたか？」と問われて、「部隊にいた時代にですか？ いや、それはありません。後にこの罪の意識は、恥ずかしい思いとともに私を苛むようになりました。この罪の意識はいつも、『私はあの時点で、自分自身に起きていたことを分かり得ただろうか』という自問と結びついていました。」

「あなたは戦後に、自分がSSにいたことを話題にするうまいタイミングを単に失したにすぎないということはありませんか」という問いに、「それはわかりません。たしかに、私は自分が書くという手段で、やるべきことは十分にやってきたと考えていたことは間違いありません。ご承知のとおり実際に私は、自ら学習過程を経験し、その結論にしたがってやってきました。とはいいいながら、この〔SSの過去という〕汚点が残っていました。それゆえに、もしもいつか自伝的なことを書く決断をするときが来れば、この残りの汚点は、その中でしかるべき場を得ねばならないことは、私には明らかでした。しかし、これは私の本の中心的なテーマではありません。」

グラスはまた、「私は、自らを『正常』と呼ぶ人びとがこわいのです。そして、私がひとり心の中で、もうすべてずっと昔の話になってしまったなあ、と思ったときでも、我々の過去は、何度も何度も立ち戻ってきたのです。我々は、そのこととともに生きることを、そして戻ってくる過去を引き受けることを学んだのです」と語っているが、彼は《「行動派知識人」として、政治家や市民に対して、ナチスの過去と正直に向き合うことを求めている》そのなかに、自分自身をどこまで含み、そのことがどのようなかたちをとってあらわれでてくるように試みていたか。更に「ドイツの過去との対決」を繰り返して主張してきた自分を「正常」とみなす感覚に対する疑いを、他方でどのようにかかえこんできたのか。「告白」はそこまで踏み入ってなされたものであったのか。いいかえれば、「戦後西ドイツの良心」と評価されてきたグラスは、自らの「告白」によってその評価と真っ向から対決する覚悟を持って行われたものであったのだろうか。

2006年11月26日記

